華岡青洲研究史

松木明知
弘前大学医学部麻酔科

日本医史学雑誌第五十一巻第三号　平成十七年四月　六日受付
平成十七年九月二十日発行　平成十七年七月二十二日受理

〔要旨〕華岡青洲（一七六〇―一八三五）が麻沸散の投与による全身麻酔下に藍屋かんの乳癌摘除術を行なったのは、一八〇四年（文化元）であった。これは世界で最初の記録が遺されている全身麻酔である。

彼に関しては過去一〇〇年多くの論考が発表されたが、中でも一九二三年に出版された呉秀三の「華岡青洲先生及其外科」は青洲の事績を尽くして完璧に近く、未解決の問題はなにも残されていないと考えられた。

しかし著者が麻酔科学の観点から先行論文を精査したところ、呉の著において「乳巌治験録」の活字化覆刻に際して捏造された箇所を発見した。また呉が「乳巌治験録」の写真二枚を合成していることも見つけた。

呉は当時東京帝国大学教授であり、医学史研究の第一人者であったため、後続の研究者はいずれも呉の説を盲信し、出版以来八十年間だれも呉の作為を見破ることは出来なかった。

呉の反倫理的行為によって青洲研究が大幅に遅れたが、このような研究の遅れは、後続の研究者が青洲に関する原史料を実見しなかったことに原因している。

キーワード――華岡青洲、麻沸散、全身麻酔、呉　秀三、乳巌治験録

はじめに

二〇〇四年（平成十六）は紀州の華岡青洲が麻沸散（一名通仙散）による全身麻酔下に乳癌手術を敢行して二〇〇周年に当たり、日本麻酔科学会、日本臨床麻酔学会など関連学会では青洲を顕彰する事業が行われた。

華岡青洲は江戸期以前の医師で、欧米にも広く知られている数少ない人物の一人であるが、それ故に青洲については過去一〇〇年にわたって詳細に研究されており、その事績の殆どが解明されたと信じられてきた。

しかし著者が専攻する麻酔科学の立場からこれまでの先行研究を再検討したところ、未解決の課題が山積しており、しかもこれら従来の研究は深刻な問題を孕んでいることが闡明になった。

本稿では、過去一〇〇年間の青洲研究を振り返り、なぜこのような深刻な事態に至ったかを究明したい。

1　江戸時代（一八六七まで）の研究

華岡青洲が全国的に有名になったのは一八〇四年（文化元）以降である。それ以前にも奇病、難病を治療することで紀州やその周辺地域では知られていた。しかし何といっても、麻沸散（一名通仙散）を与えて全身麻酔下に乳癌の手術を行ったことが大評判になり、その噂は全国的に伝播した。そのような青洲であったが、生前に彼の事績が考究され、伝記が出版されることなどはなかった。

青洲は一七八二年（天明二）から約三年間京都に遊学し、一七八五年（天明五）二月に帰郷したが、その際師友である朝倉荊山は送別の言葉を送った。[1] 京都遊学時代の青洲に関する最も古くて、しかも貴重な史料である。この送序は青洲の猛烈な勉強振りや医療に対する強い意欲を物語るが、後年の青洲が提唱した「内外合一活物窮理」の

医の思想は未だ熟成していないことを示している。

青洲が歿したのは一八三五年（天保六）であるが、門人たちは紀伊藩の儒者仁井田好古（一七七〇～一八四八）に墓誌銘の作成を依頼した。二ヵ月後の十二月に銘文は完成して碑が建立された。華岡家の墓地参道の西側に現存している。その墓誌銘は青洲の生涯を記した最も古い史料の一つである。呉秀三[2]を含めて多くの研究者[3,4]は仁井田によるこの銘文を引用しているが、仁井田の銘文自体に多くの誤りがある。例えば青洲の父の名を「尚道」、同胞を「五人」、子女を「四人」外治（外科）の師を「大和見水」と誤っている。正しくは「直道」、「八人」、「七人」、「大和見立」である。呉[2]は仁井田による銘の全文を著書に掲げ、後続の研究者はいずれもこれを孫引きしているが、呉もまた活字化する際に二、三誤った。従って後続の研究者は仁井田と呉による二重に誤った墓誌銘を読んでいることになる。これまで仁井田による銘文と呉の活字化した仁井田の銘文の誤りは指摘されたことはなかった。

仁井田が銘文を作るに際して、青洲の経歴の詳細が門人たちと華岡家から提出されたはずである。現在、華岡家には写本「華岡先生略伝」が伝えられているが、青洲の父を「尚道」、外治（外科）の師を「大和見水」と誤っていることを考えれば、仁井田がこの「華岡先生略伝」の一部を参考にしたことは間違いないと思う。呉[5]秀三も著書の中で「華岡先生略伝」から青洲の条をすべて原文のまま引用していることによってその史料的価値が高いことは理解される。しかし誰がいつ「華岡先生略伝」を執筆したかは分からない。青洲の父親の名前が間違って書かれていることからすれば、青洲の跡を継いだ第四代の随賢、すなわち次男の修平（鷺洲）でないことは確かで、恐らく当時春林軒に在籍していた複数の高弟によって編まれたものであろう。宇津木昆台[6]の「日本医譜」にも青洲についての記述がある。青洲の父直道が結婚を条件に松本氏の娘於継の難病治療を引き受けた話、十五歳の時道で三十円を拾得したが、青洲はその場に留まって戻ってきた落主に金を手渡してから家に帰った。これを聞いた父の直道は青洲の陰徳を大いに喜んで村人に酒を振舞った逸話などが記されているが、青洲の医の思想などは全く言及されてお

らず、この意味で見るべきものはない。

浅田宗伯[7]の「皇国名医伝」は、青洲と末弟の良平（鹿城）について記述しているが、青洲の記述は仁井田による墓誌銘の字句と順序を多少変えて述べるに過ぎない。

青洲は能書家としても生前から知られていた。数年の厳しい修行を終えて故郷に帰る弟子に、有名な七言絶句「竹屋蕭然烏雀喧…」の賛を付して自画像を与えたが、弟子たちから揮毫を懇願される機会も多かった。各地に遺された青洲の書蹟は弟子たちの地理的分布の広さと書家としての青洲の存在を物語っている。一八五五年（安政五）川喜多真一郎は、書画に巧みな著名な医家の名簿[8]「書画医家　鑑定便覧」を編纂したが　その下巻に青洲の簡単な略歴と落款が披見される。書家としての青洲の実力を示す恰好な証拠であろう。

以上によってこの期における史料中「華岡青洲先生略伝」、仁井田好古による墓碑銘、そして朝倉荊山の送序の三点が重要であることが理解されよう。

2　明治時代（一八六八～一九一二・七）の研究

一八九二年（明治二五）十月、杜渓隠士[9]は「華岡青洲先生（一七六〇～一八三五）」を中外医事新報に発表した。青洲の祖先から始まって、師友、思想、鎖陰・鎖肛など青洲の造語になる病名、麻酔術、手術法、そして著書、子孫などに及んで、短い文章ながらよく纏まっている。しかし親の名を「尚道」、同胞の数を「五人」、子女の数を「四人」としていることをみると、主として仁井田による墓誌銘を参考にしたことは間違いない。いずれにせよこれが青洲の事績に関する最初の単独の論考であろう。

一九〇四年（明治三七）医史学研究者の富士川游[10]は「日本医学史」を著した。第二回の学士院恩賜賞を受賞した大著である。発表以来一〇〇年経過したが、今なお燦然と輝く富士川最大の業績である。この著書の徳川後期の外

科において、その殆どを青洲の記述に費やしている。先ず当時の外科の背景を簡単に述べ、次に主として仁井田の墓誌銘を参考にして青洲の略歴に及んでいる。

富士川は青洲を評価して「実に漢・蘭折衷派ノ一大宗ト推スベキモノニシテ、我ガ邦ノ漢方医家ガ能ク蘭医方ヲ運用シテ、当時ノ医家ノ多数ヲシテ殆ド瞠若タラシメシハ、前ニ産科ノ賀川・奥諸家アリテ、今外科ノ華岡青洲アリ。」と述べている。右の評価の根拠となる青洲の医哲学、医術の概略が記され、手術法として石淋（尿道、膀胱結石）、乳癌、脱疽、流注、兎唇、鎖肛、鎖陰に及んでいるが、特に鎖肛と鎖陰の病名は青洲による命名であるとし、最後に麻酔薬である麻沸湯、手術創の処置、止血法、高弟の本間棗軒を叙して記述を終えている。記載の中で伝聞が一切除外されていることは富士川の医史学者としての高い見識を示すものであろう。

一九〇九年（明治四二）伊藤哲一[11]は「読書余録」のなかで青洲に言及しているが、過半は富士川游の「日本医学史」の記述に準拠しており、見るべきものはない。

なお一九一〇年（明治四三）に日本外科学会が中心となって青洲の生誕一五〇年祭が行われたと諸書にある。[12]日本外科学会誌や当時の関連した医学雑誌[13]を通覧しても関係記事が披見されないことから、記念祭は実際には挙行されなかったと思われる。[14]この年の十月十七日に医史学の研究会である「奨進医会」が呉秀三幹事長の許に東京帝大構内で開かれているが、青洲に関連した行事は一切行われていない。

以上から明治期においては、富士川の記述が最も高く評価されよう。

3　大正時代（一九一二・八～一九二六）の研究

和歌山赤十字社支部病院院長の前島淳一は青洲について研究し、その一部を一九一八年（大正七）五月に発行された和歌山医学会会誌八・九号に掲載した。[15]「華岡青洲先生ノ遺書」と題しているが、ここでの「遺書」は死に臨ん

での「遺書」ではなくて、青洲が「遺」した著書の意味である。青洲には六十冊の著述があるとし、その中で余り知られていない「舌診要訣」、「痢疾鎖言」、「鍼灸秘伝」の三冊を活字化して紹介している。前島にはこのほかに第十一回和歌山医学会で講演した「華岡青洲先生ノ外科」の論文があり、右記の和歌山医学会会誌に掲載されたと言われているが、現在までのところ、その論文は発見されておらず、あるいは掲載されずに終わったのかも知れない。

前島は自分の青洲研究が不十分であると考えた。青洲の曽孫貞次郎と医学史研究者の富士川游を介して、華岡家に残された青洲の著書を整理した史料を呉秀三に提供して詳細な伝記の執筆を依頼した。一九一八年（大正七）の暮れの頃と思われる

これを契機として呉秀三の本格的な青洲研究が始まった。翌一九一九年（大正八）十一月青洲に対して正五位の追贈がなされた。この贈位を記念して十月三十一日に東京で贈位記念と生誕百五十年祭が執り行われた。青洲は一七六〇年（宝暦一〇）の生まれであるから、九年遅れの生誕百五十年祭であった。本来一九一〇年（明治四三）に行われるべきであったが、何らかの理由で挙行されなかったことは前述した通りである。

呉はこの式典において青洲についての詳細な事績を発表した。その全文は雑誌「医人」の第九号「華岡青洲特集号」（一九二〇年、大正九、三月）に「華岡青洲先生伝」[16]として掲載された。前島から委嘱を受けて僅か一年ほどでこのように詳しい伝記の執筆が可能であった陰には、前島や華岡家から呉に提供された史料が質的に非常に優れ、量的にも十分であったことが窺われる。これに加えて呉の東京帝国大学教授の肩書きが調査研究上有効に作用したことは間違いない。

一九二三年（大正一二）八月、呉は吐鳳堂書店から五六八頁の大著「華岡青洲先生及其外科」[1]を上梓した。前述した「華岡青洲先生伝」[16]を大幅に拡充補強したものである。呉の序文は一九二一年（大正一〇）三月の日付を有するから、それまでに草稿は完成していたことは間違いない。とすれば、伝記執筆の委嘱を受けてから草稿が完成す

るまで僅か二年数ヶ月しか経っておらず、極めて短期間でこの大著を執筆した呉の精力と集中力は余人の追求を許さないと思う。

呉の著書は内容的に四部に別れている。第一部は青洲の伝記で、この中に華岡家の系譜、京都遊学、麻酔薬の開発、最初の乳癌患者、邸宅、官歴と終焉、交友と門人が言及されている。麻酔薬については、朝鮮朝顔の主成分はヒオスチアミンとアトロピン、草烏頭はヤプアコニチンとして、これらが催眠・鎮痛作用を有するとしている。門人としては水戸の本間玄調以下十四人の名が示されている。第二部は外科に関する事項で、「手術一般」、「手術各論」に分けて詳述されている。「手術各論」の中の「外傷以外の外科的疾患及び其の手術」において、乳癌が詳しく論じられ、図八個、写真四葉と共に「乳巖治験録」全文が掲載されている。続いて大阪の河内屋清右衛門の妻、飛洲高山の広瀬利兵衛の妻、讃洲小豆島室村の長太夫の妻、泉州貝塚松波三十郎の妻など乳癌の四症例が原文で紹介されている。第三部は青洲の著述に関する記述で、最初に門人佐藤持敬の編集した「華岡氏遺書目録」を示している。次いで「華岡家治験図巻」（三種）、「乳岩図譜」、「華岡家整骨竝巻毛綿図巻」、「華岡氏治術図識」を紹介しているが、図の多くは省略されている。第四部では、春林軒の諸規則を紹介している。これらの規則の中には、現代の医学教育においても通用する多くの事項が含まれていることは注目しなければならない。最後の付録の前半は国別に記された春林軒の門人名簿であるが、一八六〇年（万延元）までの入門者を一八八七人としている。後半には青洲の漢詩二三四篇を収めている。

右に述べたように、呉の大著は青洲の事績を余すところなく伝えた画期的なものであったが、彼はこの著書を非常な速さで仕上げた。しかし余りにも性急すぎたため、致命的な三つの誤りを犯した。この三つ誤りは共に青洲最大の業績を立証する「乳巖治験録」に関することであった。第一点は最初の手術の年紀を一八〇五年（文化二）と即断したことである。このように考えなければならない確実な証拠はなかった。第二点は「乳巖治験録」に見られ

る重要な語句の誤字を訂正して覆刻したことである。第三点は「乳巖治験録」の写真を合成してその著書に掲載したことである。この作為は研究者の倫理に著しく反する行為であったと言わざるを得ない。呉のこの作為によって、青洲の真の姿が伝えられず、後続の研究者も皆呉に騙されてしまった。研究が遅れた原因もここにあることは間違いない。

しかしながら呉の著書は青洲の活動をすべて網羅しており、全国各地に分布する門弟たちの事績を調査する外に、これ以上の研究は不可能と考えられた。事実、青洲についての論考は、呉の著書が発行されて以来、一九三〇年（昭和五）まで一篇も発表されてない。なお、呉の著書の覆刻版[17]が一九七一年（昭和四六）に京都の思文閣から出された。

この期においては呉の研究が群を抜いているが、呉は重大な誤りを犯している。

4　昭和時代（終戦前、一九二六～一九四五・七）

一九三〇年（昭和五）札幌の関場不二彦は「華岡青洲の外科一斑」[18]と題する論文を発表した。論文の冒頭は「麻酔薬としての通仙散」で、青洲の開発した麻酔薬について詳しく論述している。麻酔薬に関連して、呉が僅かに今村了庵の「医事啓源」を引用し、他はこの著からの孫引きを示したに過ぎなかったが、関場は、さらに梅元実の「薬性会元」、張介賓の「資蒙医径」、陳士鐸の「石室秘録」など中国の医書から麻酔薬の項を引用して論じ、それらの処方の中に朝鮮朝顔が含まれていることを明らかにした。次いで通仙散（麻沸散）の調剤法と実際の服用法、服用後の症状を記述している。青洲は術中、術後の合併症を予防するため、清肝解鬱湯、回生散、生神散、人参調栄湯などを与えたが、これらが楢林鎮山の処方を少し改変したに過ぎないものであるという。つまり青洲の医術のすべてが彼の創作になるものではなく、先人の優れた点を選択したことにこそ青洲の医学の特徴があると関場は指摘

した。論文の後半では、青洲が多用した膏薬の成分とその学名を列挙している。

関場はこの論考に大幅に加筆して、三年後の一九三三年（昭和八）に出版した「西医学東漸史話」[19]（下巻）に収載した。「華岡青洲の一代（六項）師大和見立の事績」と題する一章である。「青洲の応用する通仙散」、「青洲が手術に関する汎論、乳癌手術及其他の手術」、「畸形の矯正、整骨其他」、「春林軒膏方」「青洲の著書についての批判」、「青洲の就職」の六項が八四頁に亘って詳細に記述されている。ここで注目すべきは、関場は麻沸散による最初の乳癌手術を明確に「一八〇四年（文化元）」と記していることである。（二四一頁）関場はその根拠を何も示していないが、この「文化元年説」が後続の研究者によって無視されたことは誠に残念であった。呉の著書の影響がいかに大きかったかを示す間接的な証左であろう。[1]

これ以外に他の著者による二つの論文があるが、単に呉の著書から抄出、翻訳しただけで読むに価しない。いずれにせよ、関場の研究は呉以降、一九四五年（昭和二〇）の終戦時までに発表された中で最も優れたものであった。

5　昭和時代（終戦後、一九四五・八～一九八八）

一九五八年（昭和三三）四月、札幌在住で青洲の玄孫（四世の子孫）である華岡雄太郎から青洲の遺品が和歌山県立医科大学に寄贈された。これを機に医科大学教授会は青洲の顕彰会を設立したが、さしたる活動をしなかった。二年後の一九六〇年（昭和三五）が青洲の生誕二〇〇年になることを記念して、医科大学教授会は大学内だけの顕彰会を発展的に解消して、改めて「医聖・華岡青洲顕彰会」を創り、顕彰碑の設立、伝記の作成、育英事業を行うことにした。その一環として講演会が和歌山市で十一月十六日に開催された。講師は大阪の医史学界の重鎮中野操であったが、講演の内容はすべて呉秀三の著書に準拠したものであり、後に論文化された。[20]

顕彰会の中心となったのは後に医科大学の学長になった市原　硬や第一外科教授竹林　弘などであったが、事業の一つとして伝記の作製を計画し、執筆を和歌山県文化財専門審議会委員の森　慶三に依頼し、外科の部分は竹林弘教授が担当することになった。

こうして四年の歳月をかけて一九六四年（昭和三九）に完成したのが森　慶三、市原　硬、竹林　弘による「医聖華岡青洲」[3]であった。その内容は第一章　世界医学史に輝く巨人、第二章　華岡青洲の生涯、第三章　華岡流の外科、第四章　青洲の著述、第五章　しのぶ面影、第六章　春林軒塾、第七章　平山の邸址、第八章　華岡家今昔物語、第九章　青洲の先師、第十章　青洲の交友、第十一章　青洲の門下、第十二章　余光いよいよ輝く　第十三章　章名欠（年譜、系譜、門人録など）である。しかし華岡家の系譜などにおいて部分的に新しい知見が付け加えられたというものの、全体として見れば、呉の著書の順序を変えて現代文に焼き直しただけという感がぬぐえない。例えば青洲の外科を論じた部分を比較してみよう。

上段は呉の記述、下段は竹林の記述である。

第二巻　青洲先生ノ外科

第一　手術一般

一　手術用器械材料ノ準備

二　手術患者ノ準備

三　麻酔

第三章　華岡流の外科

第一節　麻酔

第二節　手術に使った器械

第三節　消毒

四　当時手術ノ状況
五　消毒法
六　下刀法
七　止血法
八　縫合法
（附）縫合後ノ処置
九　後療法
巻木綿（繃帯）
膏薬

第四節　手術方法の一般

第二　手術各論

甲　外傷ノ処置
一　創傷ノ部位
二　創傷ノ発生方ニヨル種類

第五節　外傷の処置

乙　外傷以外ノ外科的疾患及ビ其手術
一　乳嵒
二　乳巖以外ノ癌腫
三　其他ノ腫瘍
四　癰疽

第六節　外傷以外の外科
一　青洲が扱ったいろんな外科疾患
二　乳岩
三　乳巖以外の癌腫
四　その他の腫瘍
五　癰疽

五　流注
六　口辺ノ手術
肛門ノ手術（番号欠）
七　鼻ノ手術
八　眼ノ手術
九　顔面ノ手術
十　四肢ノ手術
十一　女子陰部ノ手術
十二　男子陰部ノ手術
十三　助産術
十四　整形術
丙　其他

六　流注
七　口辺の手術
八　肛門の手術
九　鼻の手術
十　眼の手術
十一　顔面の手術
十二　四肢の手術
十三　女子陰部の手術
十四　男子陰部の手術
十五　助産術
十六　整形術
第七節　その他

右に示したように、両者はその項目が殆ど同じである。一つ一つの内容もまた殆ど同一である。それだけではない。森らの著書には第十六図から第四六図まで手術器械の写真が示されているが、すべては、呉の著書から借用したものと思われ、中には敢えて同じ器械の向きを逆にして示した写真がある。

この森らの著[3]が公にされた時、後に述べる宗田[27]の論文はまだ発表されていなかった。したがって、森らが麻沸散についての新しい知見を加えることが出来なかったとしても仕方がない。しかし彼らもまた致命的な過ちを犯した。呉が活字化した「乳巖治験録」を単にそのまま転載したため、森[3]らの著書にも十八文字が欠落した「乳巖治験録」

が採用されている。さらに仁井田好古の「墓誌銘」についても呉の著書からそのまま転載した。彼らこそ地元の研究者であるから、原史料の精査をすべきであった。森らの著書とほぼ同時に「明治前日本医学史」の第四巻が敢行された。その中に大鳥蘭三郎が分担執筆した「日本外科学史」[22]が収められている。当然青洲の事績にも及んでいるが、呉の著以上の叙述はない。またここに収載された「乳巌治験録」も呉の著書からの転載に過ぎないことは、呉が見落とした十八文字が欠落していることによって証明される。

この頃、竹林[23,24]は単独で青洲についての論考を発表しているが、呉の見解を一歩でも出るものではなかった。

これより一年前の一九六三年（昭和三八）に医学史研究者で横浜市立大学医学部講師（医史学担当）を務めた石原明は、「漢方の臨床」に「華岡青洲」[25]を執筆し、「乳巌治験録」を始めて現代文に訳した。彼もまた直接原史料に当たらずに、呉の著に掲載された「乳巌治験録」を史料として用いたため、森らと同じく十八文字を訳していない。これらのことは、呉の著書がいかに絶対視されていたかを如実に物語っている。

この年の四月大阪で開催された第六四回日本医史学会総会で、阿知波五郎は「わがが国外科に及ぼしたヨーロッパ医学の影響」[26]と題する特別講演を行った。その中で、ハイステルの外科書の挿図が華岡青洲に大きな影響を与えたことを指摘したが、呉[1]、冨士川[19]も言及しなかった新知見であった。

一九七一年（昭和四六）、京都の出版社の思文閣は呉の著書の覆刻版[17]を上梓した。呉の著は一九一三年（大正一二）に出版されてから半世紀近く経っているにもかかわらず需要があり、市場で入手が非常に困難な状況が続いたためであった。覆刻に際して付録が付けられたが、その中で宗田[27]は「華岡青洲の麻酔薬、〈通仙散〉を巡る諸問題」と題する解説を書いた。その中で宗田は京都の花井仙蔵が麻酔薬開発の先駆者であることを明らかにした。そして花井の伝える麻酔薬は基本的に中国由来の処方を踏襲していることを論証した。中国では伝統的に曼陀羅華の花の部分を内用に用い、一方欧州では茎、実、葉など花以外の部分が内服に用いられたが、花井や青洲が茎、実、葉などの

部分を内服に利用していることに着目し、宗田は青洲の麻沸散が漢・蘭・和の合作の所産であるとした。

宗田はこの解説の中で自分が所蔵する中川修亭の「麻薬考」を覆刻版として収載した。当時、「麻薬考」の写本としては他に京都大学富士川本が知られていたが、宗田は富士川本には多くの虫食いや欠字があって善本でないとして、自分の所蔵する写本を覆刻したのであった。しかし後に私が京都大学で富士川本を実際に調べて見ると、宗田がいう虫食いは認められず、欠字もわずか一字のみであった。それどころか宗田本にはない筆録者森　立之の跋文や図が付されており、宗田本より格段に優れた写本であることが判明した。

覆刻版を作成することは他の研究者に対して最上の史料を提供することである。最上の史料を無視して、数段劣る自家の史料を覆刻した宗田の行為は研究者として強く非難されても当然である。なぜ宗田がこのようなことを行ったのか理解に苦しむ。宗田が発表してから二十年ほどだれもこのことに気がつかなかったのは、他の医学史研究者たちが当然行うべき原史料に直接当たることをしなかったからであり、また気が付いたとしても日本医史学会常任理事であった宗田に指摘できなかったと思われる。なおその後も宗田は自説を補強、強化するため論文を発表した。[28,29]

呉の著書の覆刻版が出た翌年、一九七二年（昭和四二）に青洲の出身地である和歌山県那賀町の「那賀町華岡青洲をたたえる会」は「華岡青洲」を刊行した。[1]呉の著書、森らの著書が共に学術的であり、しかも大冊であるため入手も困難である。[3]そのため一般の人びとでも手軽に読める本を作るように心掛けたというのが、出版の意図であった。[4]執筆したのは大阪市立中央図書館司書の大久保萬知子で、その原稿を同じく大阪市立中央図書館の藤本　篤が追加・補正した。しかし一般読者を対象にしたとはいうものの、例えば古典を原文のまま引用したり、難解な病名を羅列したり、杉田玄白や大槻玄沢の手紙を原文のまま掲載しており、一般の読者が決して手軽に読める文章ではない。また最初の全身麻酔下乳癌手術の年紀について当時の論争の経緯が記されているものの、著者（松木）の五條市教育委員会への問い合わせがことの発端であったことには全く触れず、また手術日の十三日と十六日の差に

ついても説明出来なかった。さらにこの本の一五三頁から二二二頁までの七〇頁は呉の著書からの春林軒門人録の転載である。この本は二二五頁であるから、全体の三分の一を占めている。一般の人には全く無味乾燥な門人録にこれだけの頁数を割く必要はなかったと思う。総じて藤本らによるこの本は殆ど呉の著書に準拠して新知見がなく、発行以来三十数年経った現在その使命を終えたものとして差し支えない。なお一九七五年（昭和五〇）に矢数道明[30]は青洲の妻加恵の失明について、曼陀羅華の他に附子による眼内圧の上昇も原因になっていることを動物実験の結果から推察していることは注目すべきであろう。この期においては森らによる青洲の伝記の出版と宗田による麻沸散開発の経緯の研究が特筆される。

6　平成時代（一九八九～二〇〇四）

この期の十五年間に、七〇篇を越える論文が発表されているが、それらの大半は断片的であり、見るべきものは少ない。一九九〇年（平成二）「国史大辞典」の第十一巻が上梓された。「華岡青洲」[31]の項は小曽戸洋が担当している。青洲は「父の死去により帰郷して家業を継承」とあるが、青洲が帰郷してから父が死亡したのであり、また青洲のモットー「内外合一活物窮理」を「内外合一活物究理」と誤っている。

重要な論文として宗田[32]は一九九五年（平成七）に「洋学史から見た華岡青洲」を洋学史研究年報に発表した。これは彼の青洲研究の総まとめともいうべき好論文である。青洲の麻沸散開発の端緒を理解するためには必読すべきであろう。

この年、東京女子医大の泉雄[33]　勝は専門の乳腺外科の立場から総説的な青洲の伝を「乳癌の臨床」に三回にわたって掲載した。泉雄自身の研究による特別な新知見はなく、また必ずしも重要な先行論文を引用していないのは残念である。

一九九六年（平成八）名古屋大学学医学部医療情報部の山内一信[31]と不破医院の不破洋は、不破の祖先、不破為信親子による華岡流の手術の記録を発表している。美濃不破一色村の三島良策は、一八二三年（文政六）十一月春村軒に入門して二年間勉学し、一八二五年（文政八）十月頃帰郷した。後に不破為信と改称した。不破は帰郷後、乳癌手術を多数手懸け、一八二六年（文政九）から一八七一年（明治四）にかけて八十六症例、九十五回の手術の記録を遺した。この中には息子の為信（惟治）の症例も含まれている。この中で乳癌手術は六十三例を数え、一地方だけでこれほど多数の乳癌手術が行われたことは驚異的である。青洲の医術は普及しなかったのではなくして、その事績が発掘されていなかったとする著者（松木）の推定を裏付ける貴重な論文である。

近畿大学の高橋均[35~37]らはこれまで知られていなかった「萬病一毒之説」、「序」（これは宗田が発掘したという）、「丸散便覧序」を札幌の華岡家で発掘し解説を付して一九九九年（平成十一）から二〇〇〇年（平成十二）にかけて発表した。高橋らはこれらが華岡家から発見されたので直ちに青洲の自筆としているが、疑念がない訳でもない。自筆とする確たる証拠がないのである。右記の中で「丸散便覧序」は門人の筆写ですでに知られていたものであった。その後高橋らは春林軒の外来診療録とも称すべき「癸亥春林軒続薬方冊」[38]を発掘して活字化覆刻した。春林軒の襖の下張りから発見された史料である。青洲が最初の乳癌の手術を全身麻酔下に行った前年の記録であるという。青洲の実際の診療活動を知る手掛かりとして貴重な史料であるが、処方名と患者名だけでは推定に限界があろう。いずれにせよこれらを覆刻した高橋らの労を多としたい。

一九九九年（平成十一）四月に和歌山県那賀町平山の地に「青洲の里」が完成した。春林軒を昔日の地に復元し、隣接する土地にフラワー・ヒル・ミュウジアム（華岡博物館）を併設したもので、那賀町の「医聖・華岡青洲顕彰会」が中心となり、全国に寄付を呼びかけて漸く完成したものであった。それまで和歌山県立医科大学に華岡家から寄贈されていた青洲の遺品もこのミュウジアムに移管展示されることになった。これを機会に「医聖・華岡青洲

顕彰会」は和歌山立医科大学名誉教授（麻酔科学）で、顕彰会の副会長でもあった上山英明に青洲の伝記の執筆を依頼した。こうして一九九九年（平成十一）五月に完成したのが「華岡青洲先生　その業績と人となり」[39]である。

上山が「後記」に記しているように、この書の主眼は青洲の業績を知ってもらうこと、青洲の哲学は現代においても相通ずるものがあること、中学生にも理解できる文章でかいたことの三点であるという。このような上山の意図はある程度成功していると思われる。しかし中学生にも分かる文章で書くことと、真実と真実でないことを混同しても良いということにはならない。前述したように、上山はとくに青洲の本当の業績を知ってもらうことを執筆の第一の目的にしているのであるから、何が史実なのか、何が伝聞なのかを明確に区別して読者に示す必要がある。言い伝えにしても、単なる噂なのか、当時の状況を考慮すれば、ある程度の可能性が論理的に導かれることなのかの判断を示す必要がある。

ところが、僅か一〇〇頁に満たないこの著書には誤植ではない明らかな誤りが数十ケ所認められる。このような状態では、青洲の真の業績が読者に伝わらない。それだけではない。却って誤った情報が流布することになる。これは甚だ重要なことであるから、上山の誤りの一部を以下に指摘しよう。

十三頁に青洲の妻加恵は妹背家の「次女」であるとしているが、「次女」とする根拠は一つもない。十六頁に、古代中国の医聖・華佗の秘伝書が伝えられなかった理由として、華佗の妻が秘伝書を焼却したと記述しているが、焼却したのは獄吏の妻であって、華佗の妻ではない。

二十五頁の末尾に、曼陀羅華の種子中の成分を示すとあるが、次の二十六頁の表5には種子、根、茎、葉など全体の成分含量が示されており、しかも含量の%は一桁間違って十分の一になっている。

三十九頁の表8には乳癌手術患者の出身地が記されている。この表全体が不正確であり、「陸奥」の患者一人、「筑前」の患者一人とあるのは全くの誤りである。

四十九頁には日本における医学的背景が表11に纏められているが、一七五七年（宝暦七）に「杉田玄白がオランダ流外科の講義開始」とあるが、この年は玄白が日本橋四丁目で開業したのであり、講義したことは知られていない。一八二三年（文政六）に「杉田玄白の『蘭学事始』の著述」とあるが、玄白は一八一七年（文化十四）に没しているので、一八二三年（文政六）に著述することは不可能である。

七十五頁から七十六頁のかけて青洲の有名な漢詩が紹介されており、その読み方が次のように記されている。読みの次ぎに原文を示す。

チクオク　ショウゼン　ウジャク　カマビスシ
竹　屋　蕭　然　烏　雀　喧
フウコウ　オノズカラ　カンソンニ　ガスニテキス
風　光　自　適　臥　寒　村
タダニ　オモウ　キシカイセイノ　ジュツ
唯　思　起　死　回　生　術
ナンゾ　ケイキュウ　ヒバノモンヲ　オモワン
何　望　軽　裘　肥　馬　門

問題は第四句である。上山は「ナンゾ　ケイキュウ　ヒバノモンヲ　オモワン」と読んでいるが、誰が見ても誤った読みであることは、一目瞭然であろう。第二字目の「望」を三句目第二字の「思」と間違ったのである。

青洲はこの漢詩を書いて、修行を終えて故郷に帰る多くの弟子に与えた。つまりこの漢詩には青洲の医学・医療

に対する万感の想いが込められている。これを誤って読んでは、青洲の真の精神を読者に伝えることが出来ないと思う。上山の誤りは未だあるが、最後にもう一つだけ指摘しておく。七八頁には青洲のモットーが述べられている。その一つを「活物究理」としている。これは誤りで、「活物窮理」としなければならない。「キュウ」と発音するので、「究」と「窮」は同じと考えられやすいが、意味は大きく違う。青洲は常に「活物窮理」と揮毫しており、「活物究理」と書いたものは一つもない。このような些細な誤りも積もり積もって重大な誤りとなってしまう可能性がある。

この著書は「医聖・華岡青洲顕彰会」の副会長を長年務めている上山の手になるからこそ問題となるのであり、著者（松木）が誤りを指摘するのもそのためである。時間の経過と共に誤った記述が史実とされる兆しが認められる。上山の名誉のためにも「医聖・華岡青洲顕彰会」は早急に大幅な改訂版を出すべきであろう。

著者の研究については各時期において言及しなかったのでここで簡単に触れておく。

著者が青洲研究を開始したのは一九六六年（昭和四一）からであった。先行研究を探索して少なくない論文を見出した。外国語論文は殆どなく、青洲の事績が海外では殆ど知られていないことは甚だ残念と考えた。それまでに知られている青洲の事績について英文に纏めて、麻酔科学の分野では最も水準の高い Anesthesiology に一九七〇年（昭和四五）投稿し掲載された。[10] 海外誌に青洲単独の伝記が掲載された嚆矢である。

同時に藍屋かんが手術を受けた時期についても疑問を持った。[1]「乳巖治験録」を精読すれば、かんは初診後約四十日で手術を受けていることが直ちに理解されるのに、[3,4,22,23,25] 呉秀三は一年後の一八〇五年（文化二）十月十三日に手術が行なわれたとし、[11,12] 後続の研究者もそれに従った。著者はこの問題を解決するためにはかんの没年月日が重要と考えて探索した結果、一八〇五年（文化二）二月二十六日にかんが歿していることを突き止めた。それによって、かんの手術日は一八〇四年（文化元）十月十三日と決定できた。

青洲は麻沸散の開発に十数年近い歳月をかけたという。なぜそのように長期間を要したのか謎である。この問題を解決するため、著者は青洲と同じ処方の麻沸散を作り、犬、ウサギ、ラット、マウスを用いて実験を繰り返した。これらの動物では、人体に換算して二～十倍量を投与しても全身麻酔状態を作ることは出来なかった。教室員（女性）が服用したところ、全身麻酔の状態となり、約八時間持続した。このような所見を考慮に入れると、青洲は動物実験を繰り返したと推察されるが、それだけでは人の対する麻沸散の至適投与量を決定できず、最終的に母の於継と妻の加恵を対象にした人体実験に踏みきらざるを得なかったという伝聞の信憑性も、強ち無視できないと思われる。この著者の研究もまた十年近くかかっており、一九七五年（昭和五十）から一九八九年（平成元）頃までの実験、研究を纏めたものであった。この概要を一九九二年（平成四）の日本医史学雑誌[13]に発表した。これは実験医史学とも言うべき新しい分野である。

華岡流の手術については、青洲が秘密主義を採ったため全国的に普及しなかったという説が一般的であった。弟子は全国各地に分布しており、著者は各地の弟子たちの業績が十分に発掘されていないと考えた。各地の手術例を鋭意捜し求めたところ、果たせるかな幕末の津軽地方で鼻再接着術[14]が施行されたことを発掘した。また福井で橋本左内も全麻下で手術を行っていることを見出した。[15]

一九八九年（平成元）以降、著者は青洲の系譜の研究に着手した。華岡家はその系図の詳細が諸書に公表されており、直系の御子孫も現存しておられる。それにも拘らず、青洲の同胞、子女の中で未だ氏名や生没年が知られていない人物が存することは不可解と言わねばならない。青洲を深く理解しようとすれば、その家族についても知る必要があると考えてその解明に努力した。一九九七年（平成九）から二〇〇四年（平成十六）まで、青洲の同胞、子女、妻加恵、そして最初の乳癌手術患者藍屋かんの系譜的研究を日本医史学会で発表し、論文化して日本医史学雑誌[16,17]に発表した。大きな進歩であったと思う。[18]

青洲最大の業績は麻沸散による全身麻酔法の開発とその臨床応用であることは、万人が等しく認めるところである。それを立証するのは呉秀三の旧蔵であった写本「乳巖治験録」である。前述したように、呉は「乳巖治験録」[1]全文を活字化して覆刻した。（二六〇～二六八頁）しかし「乳巖治験録」自体にも、呉による覆刻文にも多くの疑問点があることは、これまでだれも気が付かなかった。「乳巖治験録」は青洲自筆とされるが故に、日本医学史上最も[25]貴重な史料とされるが、自筆とする証拠は一つもなく、また漢詩を得意とした青洲の手になるにも拘わらず、漢字の誤字、誤用が目立つ。筆跡も青洲が弟子に与えた免状の筆跡とは素人目にも異なる。したがって著者は「乳巖治験録」が青洲の自筆でないことを論文化して、日本医史学雑誌に投稿したが、査読者と意見が一致しなかった。プライオリテーの問題もあるので著者は原稿を返却してもらい、他誌[49,50]に発表し、さらに自著に収載することにした。

このような経緯で上梓されたのが、二〇〇二年（平成十四）の「華岡青洲の新研究」[51]であり、二〇〇四年（平成十六）の「華岡青洲と「乳巖治験録」」[52]である。この二書には、著者の青洲に関する主要な論考の殆どが収められており、重要な史料は写真で示されている。この二つの著書において、著者は先行研究者の多くの誤りを指摘している。これはあくまでも真実を追究するという学問上の行為であって、先行研究者の人格を非難しているのではない。日本ではややもすれば、学問上の指摘を人格の非難であると思い違いしている人が多い。このため、日本では学問上の論争が成立しないと言われる。

このような非難を未然に予防するため、著者は重要かつ不可欠な史料はすべて写真版にして研究者や読者に提示し、著者の主張についてその適否を判断してもらっているのである。これが科学的な態度ではないかと思う。

著者の研究の中で最新かつ重要な知見は、杉田立卿の「療乳嵓記」[53]の発掘であろう。これによって青洲は門人以外にも秘伝を伝授したこと、一八一二年（文化九）以前にも江戸で乳癌手術が行なわれていたこと、杉田玄白がなぜ一八一二年（文化九）に青洲に手紙を書いたのかなど、これまでの青洲研究で未解決の重要な問題が解明された。

右に述べたように、著者によって青洲の研究が大きく進歩したことは間違いないと思う。

7　欧文による華岡青洲の研究

前節の末尾において著者の研究を一括して言及したが、著者が書いた最初の論文[19]は、一九七〇年（昭和四五）に Anesthesiology 誌に掲載された英文の論文 Seishu Hanaoka, a Japanese Pioneer in Anesthesia であった。その後最初の手術の期日についての新知見が得られたので同誌に追加の記事[32]を書いた。これらを纏めて一九七三年（昭和四十八）の日本医史学雑誌に英語の論文[33]として発表した。

一九七二年（昭和四十七）九月、京都において第五回世界麻酔科医会（World Congress of Anaesthesiologists 世界麻酔学会と訳されているが誤り）が開催された。著者が米国ミシガン大学へ留学中のことであった。この学会で緒方富雄博士は「華岡青洲の麻酔と外科」と題する特別講演を行った。緒方博士の講演は青洲の事績全般に及んでいるが、事前に宗田一から種々示唆を受けているため、青洲の曼陀羅華の使用法は中国と西洋の両者から影響を受けたとする宗田の見解を紹介している。

緒方の講演内容は翌一九七三年（昭和四八）に英国の麻酔科学の専門誌 Anaesthesia に[36] Seishu Hanaoka and his anaesthesiology and surgery と題して掲載された。この英文では日本語原稿に述べられている手術時期が一年遡るかもしれないという著者（松木）の研究は削除されてあり、手術日を一八〇五（文化二）十月十三日であるとしている。

この論文とタイトルも文章も殆ど同じ論文が同じ一九七三年（昭和四八）に[37] International Surgery 誌に掲載された。現在では、二重投稿の非難を受けるであろう。緒方がなぜこのような挙に出たのか不可解である。しかし外国誌に掲載されたため些か青洲の伝の普及に役立ったことは間違いないと思う。

著者や緒方博士以前に青洲の伝記を欧文で紹介した人がいなかった訳でない。一九六三年（昭和三八）大阪で第十六回日本医学会が開催された時、和歌山県立医科大学外科の竹林　弘教授は総会で講演した。[58]竹林は講演原稿を英文化して、翌年に和歌山県立医大の英文誌 Wakayama Medical Report に“Seishu Hanaoka, Pioneer of The General Anesthesia and The Modern Surgery”と題して発表した。内容としては呉の著書を基礎にしており、とくに目新しい知見は盛り込まれていない。また国内の雑誌に掲載されたため海外の読者が多かったとは思われない。

青洲を紹介する単独の論文として右に延べた以外に、オランダの医史学者ボイケルス[59]によるオランダ語の一編がある。藍屋かんの手術日を正しく一八〇四年（文化元）としたのは適切である。しかし特別の新知見は述べられていない。このほかに青洲だけを論じたのではないが、オックスフォード大学麻酔科のステイーブンス[60]の論文がある。彼は京都大学医学部麻酔科のリサーチフェロウとして来日し、日本の麻酔科学の歴史に興味を持った。そして一年間の滞在後に Journal of Royal Society of Medicine に Anaesthesia in Japan:past and present と題して論文を発表した。日本の医療における麻酔科学について簡潔に記述し、青洲についても言及しているが、肝心の手術日を誤っており残念である。

呉はドイツのグールト[61]が彼の著書のなかで青洲の事績に及んでいると紹介している。ベルリン大学の外科教授であったグールトは一八九八年（明治三一）にベルリンのアウグスト・ヒルシュワルド社から全三巻の「外科学とその実施の歴史―各国の外科・古代と中世―」を出版した。その第一巻は各国の外科史を記述し、その日本の項でグールトは次のように述べている。

日本の江戸時代の外科は最初ポルトガル人によって将来されたが、その内容は幼稚なもので、小さな傷の処置が主なものであった。

しかし、十九世紀の初頭、華岡青洲によって大手術が行なわれるようになった。青洲は曼陀羅華（ストラモニウ

ム）を大量に服用させて麻酔を行ったが、それによって患者は三日間も混迷状態にあった。

この青洲についてのグールトの記述は八行足らずの短い文章である。呉の著書に四十年遅れて上梓された森慶三[62]らの著書においても、グールトの文章が紹介されているが、呉の著書からそのまま転載したものであった。ただし呉の著に見られる頁の誤り s28～83 を s82～83 と訂正している。森[62]らは「この記事がまず全医学会の注目を喚びさまし、これに導かれてやがて華岡青洲の名声が遂に世界万国に知れわたるに至ったのだと見ても、敢えて過言ではあるまいと思われる。」と記している。しかし青洲については前記したように僅か八行しか書かれていないので、その文章だけで青洲の業が全世界に知られるようになったとは到底考えられない。グールトは青洲の項でなにも文献をしめしていないので、どこから情報を入手したのか分からない。あるいは東京帝国大学で外科を教えていたスクリバ（一八四八～一九〇五）から教えてもらったもかも知れない。

グールトの著書に先立つこと十三年の一八八五年（明治十八）にアメリカの医師ホイットニイは日本アジア協会で「日本における医学上の進歩の歴史」と題して講演したが、その全文を[63] The Transactions of The Asiatic Society of Japan に掲載した。この中でホイットニイは青洲の医哲学である「内外合一活物窮理」を紹介し、麻沸散の処方に及んでいるが、それは曼陀羅華、草烏頭、白芷、当帰、川芎の五剤で、天南星を含まないものであった。このホイットニイの記事は青洲を欧米に紹介した最初のものであろう。なお本論文は横浜[64]のメイクルジョン社から単独の著として出版された。

参考文献

（1）呉秀三『華岡青洲先生及其外科』吐鳳堂書店、一六～一七頁、東京、一九二三年（大正一二）
（2）文献1の八五～八七頁

（3）森慶三、市原硬、竹村弘『医聖華岡青洲』医聖華岡青洲先生顕彰会、和歌山市、一九六四年（昭和三九）
（4）藤本篤、大久保萬知子『華岡青洲』、那賀町華岡青洲をたたえる会、和歌山県那賀町、一九七二年（昭和四七）
（5）文献1の四～二一頁
（6）宇津木昆台『日本医譜』
呉が引用した文と無窮会図書館本の本文とは二、三異なる点が見られる。
（7）浅田宗伯『皇国名医伝（下）』、一八五二年（嘉永五）勿誤薬室、信濃
（8）川喜多真一郎輯『書画医家　鑒定便覧（拾遺）』、一八五五年（安政二）、須原屋茂兵衛、江戸
（9）杜渓隠士「華岡青洲先生（一七六〇至一八三五）」『中外医事新報』三〇二号、四四～四八頁、一八九二年（明治二五）
（10）富士川游『日本医学史』東京、一九〇四年（明治三七）
なお一九四一年（昭和一六）日新書院社から決定版が出された。
（11）伊藤哲一「読書余録」『十全会雑誌』、五三号、一八～二一頁、一九〇九年（明治四二）
（12）日本外科学会編「日本外科学会百年史」『日本外科学会雑誌』　一〇一巻、臨時増刊号、二〇〇〇年（平成十二）
（13）『中外医事新報』、『東京医事新誌』、『医学中央雑誌』などをみても青洲の百五十年祭の記述はない。
（14）『中外医事新報』七三号（明治四三年十一月五日）
（15）前島淳一「華岡青洲先生ノ遺書」『和歌山県医学会会誌』第八・九号、一～二六頁、一九一八年（大正七）
（16）呉秀三「華岡青洲先生伝」『医人九号附録』、六～二八頁、一九二〇年（大正九）
（17）呉秀三『華岡青洲先生及其外科』復刻版　思文閣出版、京都、一九七一年（昭和四六）
（18）関場不二彦「華岡青洲の外科一斑（一）、（二）」『北海医報』　六九号、一一～三二頁、一九三〇年（昭和五）、七〇号、二六～三二頁、一九三一年（昭和六）
（19）関場不二彦『西医学東漸史話（上、下）』吐鳳堂書店、東京、一九三三年（昭和八）
（20）中野　操「華岡青洲先生誕生二百年を記念して―青洲先生顕彰会発会式記念講演―」『日本医事新報』一九一〇号、五五～五九頁、一九六〇年（昭和三五）

(21) 文献3の三八～四〇頁
(22) 大島蘭三郎　明治前日本外科学史　日本学士院日本科学史刊行会編　明治前日本医学史　第四巻、日本学術振興会、東京、一九六四年（昭和三九）、八〇七～八一四頁
(23) 竹林弘「華岡青洲―日本臨床外科の創始者―」『漢方の臨床』一〇巻、五三六～五五三頁、一九六三年（昭和三八）
(24) 竹林弘「麻酔医の父―華岡青洲」『臨床外科』一八巻、九七～一〇二頁、一九六三年（昭和三八）
(25) 石原明「華岡青洲―日本臨床外科の創始者―」『漢方の臨床』一〇巻、五三六～五五三頁、一九六三年（昭和三八）
(26) 阿知波五郎「わが国外科に及ぼしたヨーロッパ医学の影響（三）」『日本医史学雑誌』一二巻、二～六五頁、一九六六年（昭和四一）
(27) 宗田一「華岡青洲の麻酔薬（通仙散）をめぐる諸問題」呉秀三著『華岡青洲先生及其外科』覆刻版附録、思文閣出版、京都、一九七一年（昭和四六）
(28) 宗田一「華岡青洲解説」大塚敬節、矢数道明責任編集『近世漢方医学書集成二九「華岡青洲」（一）』、名著出版、東京、一九八六年（昭和六一）
(29) 宗田一「華岡青洲の麻酔薬開発　―外来技術受容の日本化―」末中哲夫編　実学史研究iv、思文閣出版、京都、一九八七年（昭和六二）
(30) 矢数道明「洋金花（白花曼陀羅）の全身麻酔と華岡青洲の妻の失明について」『漢方研究』三七号、六～七頁、一九七五年（昭和五〇）
(31) 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典（第一一巻）』、吉川弘文館、六三六頁、東京、一九九〇年（平成二）
(32) 宗田一「洋学史から見た華岡青洲」『洋学3　洋学史学会研究年報』八坂書房、東京、一九九五年（平成七）所収
(33) 泉雄勝「華岡青洲とその業績（一）～（三）」、『乳癌の臨床』九巻、四三三～四四〇頁、五九三～六〇二頁、一九九四年（平成六）、一〇巻、一四五～一四九頁、一九九五年（平成七）
(34) 山内一信、不破洋「不破家華岡青洲手術記録の検討」『日本医史学雑誌』四二巻、六一～七六頁、一九九六年（平成八）
(35) 高橋均、松村巧「華岡青洲自筆「萬病一毒之説」考―現代語訳および注解―」『近畿大学医学雑誌』二四巻、三九三～三

九五頁、一九九九年（平成一一）
この「萬病一毒之説」は宗田一が札幌の華岡家で見い出したが、そのまま研究されないでいたという。
(36) 高橋均、松村巧「華岡青洲自筆「序」考―現代語訳および注解―」『近畿大学医学雑誌』二四巻、三九七～三九九頁、一九九九年（平成一一）
(37) 高橋均、松村巧「華岡青洲自筆「丸散便覧序」考―現代語訳および注解―」『近畿大学医学雑誌』二五巻、一六一～一六四頁、二〇〇〇年（平成一二）
(38) 高橋均、坂田育弘、児玉重隆「癸亥春林軒讀薬方冊（一）～（四）」『日本医史学雑誌』四七巻　三八二～三九三頁、八四四～八五三頁、二〇〇二年（平成一四）、四八巻、二五九～二六六頁、三五五～三六八頁、二〇〇三年（平成一五）
(39) 上山英明『華岡青洲先生その業績とひととなり』医聖・華岡青洲顕彰会、和歌山県那賀町、一九九九年（平成一一）
(40) Matsuki A: Seishu Hanaoka, a Japanese Pioneer in Anesthesia. Anesthesiology. 32:446-450, 1970.
(41) 松木明知「華岡青洲と藍屋利兵衛の母」『日本医事新報』二四六七号、一二〇頁、一九七一年（昭和四六）
(42) 松木明知「華岡青洲と最初の全身麻酔下乳癌手術の期日」『麻酔』二一巻、三〇〇～三〇一頁、一九七二年（昭和四七）
(43) 松木明知「華岡青洲の麻酔薬通仙散に関する実験的研究」『日本医史学雑誌』三八巻、二三六～二三七頁、一九九二年（平成四）
(44) 松木明知「津軽における最初の全身麻酔　―藩医三上道隆の事績」『日本医史学雑誌』三三巻、二〇三～二一七頁、一九八七年（昭和六二）
(45) 松木明知「華岡青洲の麻酔法の普及について　―福井藩橋本左内による手術症例の検討―」『日本医史学雑誌』四二巻、二八九～三〇二頁、一九九六年（平成八）
(46) 松木明知「地蔵寺過去帳による華岡青洲の系譜に関する新知見」『日本医史学雑誌』四五巻、四五～七六頁、一九九九年（平成一一）
(47) 松木明知「華岡青洲の系譜的研究　―和歌山海南市の川端家、柳川家の調査から―」『日本医史学雑誌』四六巻、四七～五五頁、二〇〇〇年（平成一二）

(48) 松木明知「講御堂過去帳による藍屋家の系譜的研究」『日本医史学雑誌』四三巻、四一五～四二二頁、一九九六年（平成九）
(49) 松木明知「華岡青洲の「乳巖治験録」の新研究（上）（下）」『麻酔』四九巻、九二〇～九二五頁、一〇三八～一〇四二頁、二〇〇〇年（平成一二）
(50) 松木明知「『乳巖治験録』は青洲の自筆ではない」『日本医事新報』四〇三八号、二六～三二頁、二〇〇一年（平成一三）
(51) 松木明知『華岡青洲の新研究』（限定三〇〇部）岩波出版サービスセンター、東京、二〇〇二年（平成一四）
(52) 松木明知『華岡青洲と「乳巖治験録」』（限定三〇〇部）、岩波出版サービスセンター、東京、二〇〇四年（平成一六）
(53) 文献52の五一～六六頁
(54) Matsuki A: The Correct Date of The First General Anesthesia by S. Hanaoka, Anesthesiology. 39:565, 1973.
(55) Matsuki A: General Anesthesia and Surgery by Seishu Hanaoka, J Japan Society Medical History. 19:237-245, 1973.
(56) Ogata T: Seishu Hanaoka and His Anesthesiology and Surgery, Anaesthesia. 28:645-652, 1973.
(57) Ogata T: Seishu Hanaoka, His Anesthesiology and Surgery, International Surgery. 58:759-762, 1973.
(58) Takebayashi H: Seishu Hanaoka, Pioneer of The General Anesthesia and The Modern Surgery, Wakayama Medical Reports. 9:78-86, 1964.
(59) Beukers H: Hanaoka Seishu — Japons Pioneer van de heelkunde, Geschidens der Geneeskunde. 1:50-55, 1993.
(60) Stevens JE: Anesthesia in Japan: Past and Present, J Royal Society Medicine. 79:294-298, 1986.
(61) Gurlt E: Geschichte der Chirurgie and ihrer Ausiibung — Valkschirurgie 82-83, August Hirshwald, Berlin, 1898.
(62) 文献3の二七六～二七七頁
(63) Whitney WN: Notes on The History of Medical Progress in Japan, Transaction of The Asiatic Society. 12:245-469, 1885.
(64) Whitney WN: Notes on The History of Medical Progress in Japan. R. Meiklejohn & Co., . Yokohama, 1885

参考文献

(1) 福田雅代編『桔梗―三宅秀とその周辺』、岩波ブックセンター信山社、一九八五
(2) 酒井シヅ「艮斎と秀」、『桔梗』所収

A Brief History of the Biographical Study of Seishu Hanaoka

Akitomo Matsuki,MD,FRCA

It was 1804 when Seishu Hanaoka (華岡青洲, 1760-1835), performed an excision of the breast cancer of a patient named Kan Aiya (藍屋かん) under general anesthesia by Mahutu-san (麻沸散). This is the first documented general anesthesia in the world. Numerous studies have been made about Seishu Hanaoka during the past 100 years and among them the monograph titled "Seishu Hanaoka and His Surgery" by Shuzo Kure (呉　秀三) published in 1923, had been thought to be nearly perfect and it had been thought that nothing had been left unsolved concerning the biography of Hanaoka.

The present author made an exhaustive investigation of the monograph in terms of anesthesiology and found a serious forgery in the transcription of Hanaoka's "Nyugan chiken roku" (乳巌治験録). The author also detected two forged photographs of the record in Kure's book. As Kure was a professor of psychiatry of the Tokyo Imperial University and a leading medical historian at that time, other investigators of Hanaoka followed him unquestioningly and they could not reveal Kure's forgery for 80 years since its publication.

Because of Kure's forgery the biographical study of Hanaoka was retarded seriously and incorrect information about him has prevailed. The cause of the academic retardation is considered to have been mainly due to the lack of a bibliographical survey of original documents of Hanaoka by following investigators.